様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 13 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2005～2008
課題番号：17520473
研究課題名（和文）　アルタイ・サヤン渓谷の岩絵銘文調査と古代遊牧民の聖山信仰に関する歴史民俗学的研究
研究課題名（英文）　Researches of Rock Art Inscriptions of the Altai-Sayan Canyons and Historical Folklore Studies of Mountain Worship in Ancient Nomads

研究代表者
大澤　孝（OSAWA TAKASHI）
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号：20263345

研究成果の概要：
本研究では西暦６ー１２世紀の古代トルコ系遊牧民の書き残した墓碑銘および岸壁画銘文の解読を通して彼らの聖山信仰や祖先信仰の実態を分析考察した。その結果、草原中の岩場には狩猟場面や鹿や山羊など多くの野獣が描かれていることから、彼らがこの岩に対して来世においても、死者に豊穣な獲物がもたらされることを祈願していたこと、銘文からはここに彼らの祖先の霊が降臨する場として認識されていたことがわかり、彼らの聖山信仰の実態が明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	1,300,000	0	1,300,000
２００６年度	900,000	0	900,000
２００７年度	600,000	180,000	780,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,500,000	390,000	3,890,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：アルタイ山脈、岩絵銘文、古代トルコ系遊牧民、聖山信仰、歴史民俗学

１．研究開始当初の背景

本研究が対象とする６ー１２世紀の古代トルコ時代の遊牧民の死生観や世界観については 19 世紀の帝政ロシア時代から 20 世紀のソビエト時代にかけての旅行家や文献学者、考古学者たちによって様々な様相が指摘されてきた。たとえば、文献学者は埋葬地や追悼遺蹟に立てられた古代トルコ語碑文や銘文を解読し、そこに窺える断片的な字句を通して、埋葬および追悼のプロセスを考察している。たとえば、ロシア人の文献学者は石囲い遺蹟の東面にたつ石人と未加工立石の機能や意義について碑文中の被葬者が生前に戦闘で殺した敵人を象徴して建てられたバルバル（balbal）石と比較考察しつつ分析した。またオルホン碑文では「死ぬ」表現として、鳥が「飛翔する」語彙が使用されており、当時の彼らの間では、死者の霊魂は鳥のように天空に向かい飛翔する姿として認識されていたことが窺えるように、彼らの死生観や世界観に関わる碑文字句の分析を通して彼らの死生観を文献学的に明らかにしよ

うとしてきた。

他方、考古学者などは古代トルコ時代に特徴的な埋葬遺蹟や追悼遺物から発掘調査された副葬品や埋葬遺物の分析などを通して、親族の死者に対する扱いなどから、彼らの死生観を知るための材料として分析を行ってきている。また現代南シベリアの少数民族について民俗学者は現代シベリアのトルコ語族に共通的なシャーマニズム的な埋葬儀礼や宗教儀式を伝統的な要素と認めて、それを参考に当時の埋葬儀礼や追悼儀礼を復元する試みとして考察がなされてきた。

ただし、従来の研究では文献学者が扱う資料と、考古学者が扱う資料は別々であり、両者が有機的な関連性を持っているかどうかについては無視されて、ただここの解読や考古学的分析が行われてきたきらいは否めないのである。またこれまでの文献学者がその解読の根拠とした１９世紀末当時のV. V. ラドロフらが行った古代トルコ・ルーン文字銘文類のスケッチや拓本類については、今日のレベルからみると必ずしも精度のよいものとはいえず、解読された箇所についても疑問点が残されたものも少なくない。こうした点を鑑みても、従来の読みはなお改善すべき余地を残しているのであり、最新の代トルコ語文献学的成果に依拠しつつ再検討を要するものである。

また考古学・民族学の分野でも、これまではサヤン・アルタイ方面の岩壁に刻まれた古代トルコ時代の壁画については、そのそばに刻まれた古代トルコ語銘文やタムガとの連関についてはさほど追求されることなく、多数の狩猟図や野獣が描かれているというただそれだけで＜聖なる岩場＞というレッテルは貼られているものの、それらが歴史時代のいかなる場面で描かれ、それが遊牧民の精神世界角上で機能したかを実証的に分析した調査研究はきわめて少ないという現状があった。

その後、1991 年にソビエト連邦が崩壊した結果、これまでサヤン・アルタイ地方への現地調査は、徐々に緩和されて、現地調査機関がそれまで立ち入ることができなかった地域にまで、欧米や日本などの西側研究機関との合同調査という形で新たな研究体制の構築がなされつつあり、外来からの研究者を受け入れる環境が現地に生まれてきたのである。本研究もそうした新たな研究環境の激変によって実現可能となったものということができよう。

２．研究の目的

本研究の目的は、西暦６ー１２世紀のアルタイ・サヤン山脈の草原地域において活動してきた古代トルコ系遊牧民の死生観と世界観を明らかにするための一環として、彼らが聖なる地として認識する小高い岩山に刻まれた古代トルコ語の銘文を調査し、新たな読みを学界に提出すること、そしてその近くに線刻された狩猟図や野獣などの画像との関連性を歴史文献学並びに図像学的に明らかにすること、そしてその画像が刻まれた岩山そのものが在地の遊牧社会でいかなる歴史的意義を有していたかを明らかにすることにある。

ただ従来の研究では、岩山に刻まれた銘文は文献学者がオルホン碑文やイェニセイ碑文などの他のルーン文字資料類のひとつとして解読するにとどまってきており、それらが発見された埋葬遺物や遺蹟の場所や刻まれた岩山との関連性についてはほとんど分析されてはいない。当然ながら、それらの銘文が刻まれた画像の解釈も行われてはいないし、それら画像が何故にこの岩山に刻まれているかという背景についても考察されていない。

私はこうした研究状況をふまえて、銘文箇所については現地の研究機関や研究者の協力を得つつ、より精巧な写真機材を用いて、鮮明な写真を撮ることを心がけ、それをもとに解読する。それでも不明な字句については、拓本をとって不鮮明な文字を明らかにすべくつとめたい。こうした作業を通して、まずは文献学的に信憑性のある読みを学界に提出すべく心がけようとした。

また、岩絵に描かれた画像についても現地の研究機関、研究者と協力して、それが確かに図像的に古代トルコ時代に特徴的な図像であると確認した上で、画像を写真撮影したりスケッチをとったりして、銘文と画像との意味的連関を追求すべくつとめようとした。

３．研究の方法

本研究の方法としては現地の研究諸機関および現地の研究者と友好的な関係を築き、彼らの協力および助けを得て現地調査を実施し、岩絵に伴う文字資料を調査収集する、その上で岩絵の主題やモティーフについても写真撮影による資料収集と文献学的・歴史学的分析と考察を行い、銘文と岩絵との意味的連関および岩絵資料の歴史的意味を探るという方向で研究を進めていった。

（１）私は 2005 年度には、現地調査を実施する前段階として、以前に訪れたトゥバ共和国のキジル市郷土博物館およびハカス共和国のミヌシンスク市郷土博物館所蔵のイェニセイ川の上・中流域で発見された古代トルコ語銘文について、私が撮影した写真や拓本などから解読作業を行った。それはこれらが本研究対象地域のサヤン渓谷沿いの草原地帯で発見されたものであり、当該地区の古代

トルコ系遊牧民が彼らの埋葬遺蹟に立ておいた碑文に記したものであり、本研究テーマともきわめて密接な関係にあることが推測されたからである。またこうした墓碑銘の解読作業と平行して、私はこれまた以前に現地の研究者の助けを借りて実施したハカス共和国のスレク岩場に刻まれた古代トルコ語の銘文についても解読研究を進めるとともに、そこに描かれた狩猟場面や山羊、鹿、ラクダなどの描かれ方についても考察を行った。

（２）2005 年９月には、ロシアのゴルノ・アルタイ地方でノボシビルスク考古・民族研究所の V. D. クバレフおよび G.クバレフ父子の考古学者たちとゴルノ・アルタイ歴史考古博物館所蔵の石人類や岩絵銘文などを調査した。その上で、野外調査としてコシ・アガチ地区やオングダイ地区にある古代トルコ時代の岸壁画のあるカルバク・タシュ岩やビチグ・ボム岩場などに赴き、その銘文や画像を写真撮影やスケッチで記録し、またノボシビルスク考古・民族研究所でもクバレフ氏とともに当地の野外博物館で石人資料を撮影調査した。帰国後はその画像記録から銘文を新たに解読し、その岩に刻まれていることの意味を考察した。

（３）2006 年８月には中国アルタイの岩絵銘文を調査すべく、中国領のアルタイ県およびイリ地区を訪れた。まずアルタイ県では現地の博物館に所蔵された古代トルコ時代の石人や県文化センターの研究者とともに、古代トルコ時代の石人などの埋葬遺蹟や岩絵のある岩場を訪れ、鮮明な写真をとるべく心がけた。またイリ地区でもイリ文物局の研究者の協力を得て、同地区の博物館所蔵の古代トルコ時代の墓から出土した埋葬遺物や石人類を撮影・調査した。その上、同地区の野外に展示された石人類についても調査する機会を得、遺蹟の再利用という観点から新たな分析を加えた。

（４）2007 年５月にはキルギズ共和国での国際会議に参加するとともに、現地の国立歴博物館所蔵の古代トルコ時代の石人資料やルーン文字銘文などの資料を撮影調査する機会を得た。また一部ではあるが、サイマル・タシュからもたらされた岩絵の資料についても撮影・調査することができた。

（５）2008 年８月にはモンゴル国のアル・ハンガイ県に位置する古代トルコ時代の岩に刻まれた銘文や画像資料を調査した。これは本研究対象となるアルタイ・サヤン方面の岩絵銘文との比較対象を行う意味で実施したものである。

私は以上の現地調査で得られた岩絵銘文について、まずは銘文部については最新のトルコ文献学的成果に依拠しつつ解読を進めた。その上で当該銘文が刻まれた歴史的・文化的背景について考察を行った。さらに銘文を持つ岩絵についても、銘文の字句内容との関連性についても岩絵について求め、両資料における共通性について指摘・分析する方法で両者の関連性を探った。またこうした岩絵銘文が描かれている岩山そのものの歴史地理的意味についても、当時の遊牧勢力の立場から考察すべくつとめた。

４．研究成果

まず、本研究は何よりも現地の研究機関および研究者との交流を通じて実施されたという意味において意義深いものとなったことを申し添えたい。なぜならばそれ以前に現地の研究者の協力を得て調査を行った前例がないからである。また現地の調査機関の協力なくして、本研究は遂行できないものであったからである。

こうした現地調査で得た岩絵銘文の特徴であるが、主にアルタイ山脈周辺の岩に描かれた古代トルコ・ルーン文字銘文はサヤン山脈周辺の古代トルコ・ルーン文字銘文、すなわちサヤン山脈の渓谷を流れるイェニセイ川の中・上流域の草原地帯で発見された銘文とその文字の形、文体や表現方法という点できわめて近しい関係にあることが看取できた。このことは両地区における古代トルコ遊牧民が同じ文化体系に属していたことの証といえるであろう。その背景としては片方の地区に遊牧していた遊牧グループが何らかのきっかけでその遊牧範囲を変えていった、つまり移動を余儀なくされた結果、生じた現象といえるかもしれない。

その上で、ゴルノ・アルタイ地域の岩絵銘文からは、銘文はその岩絵を描いた草原を遊牧していた集団により刻まれたこと、銘文からは彼らがこの岩を山の霊魂が降りてくる場として描いていること、そしてその山の霊魂も彼らの祖霊のひとつとして扱われていること、が判明するが、こうしたことは歴史民俗学的に注目すべき事柄である。ここから我々は、彼ら現地の遊牧民にとっては聖山崇拝も彼らの祖先崇拝のひとつとして見なされていることが看取できた。オルホン碑文には彼ら突厥の民が「天神（tengri)」とともに「土地と水（yer su)」を崇拝していたことが強調されて描かれているが、彼らが崇拝する「土地と水」の霊の中に聖山信仰も含まれていること、そしてそれらが彼らの祖先崇拝と密接に絡んでいることを示唆している。

またゴルノ・アルタイ地区のカラバク・タシュ銘文の刻まれた岩肌には、古代トルコ遊牧民が刻んだと見なされるタムガ（刻印）が約３３個も確認された。このことは本岩絵銘文が刻まれた岩場に当時の古代トルコ遊牧集団が集まってきていたことを伝えるもの

である。そして本岩絵が彼らの土地神である山の霊魂に捧げる精神的な聖画であることを想起するならば、これらのタムガの存在は、在地の有力な部族の首領のもとに、統括された被支配部族がここに集結し、彼らの土地神に対して崇拝を行った様子を浮き彫りにする。おそらく、この首領は豊穣な狩りの収穫を願うべく鹿や山羊などを描いたこの聖なる岩への信仰心を通して、彼ら諸部族を精神的に束ねていたと解釈できる。我々は今後、こうした岩場の存在を通して、政治集団の存在を知ると同時に、彼らを精神的に束ねる文化装置としての聖山の歴史文化的な役割をみることになる。

また本研究を通して、私は青銅器時代の遺物や鹿石などの遺物が古代トルコ時代においても彼らの遺蹟や遺物を形作る遺蹟として再利用されている事実を新たに確認することができた。この事実は、これまでの歴史学や考古学の解釈では、全く別時代の遺物がたまたま再利用されたものであり、両時代には特に歴史的関連性は認められないものとして、無視されるのが常であった。

しかし私の考えはこれまでの解釈とは一線を画するものである。

私自身はむしろ、前代の遺蹟や遺物はただ単に後生の遊牧民の遺蹟のための資材として利用されたにすぎず、これら遊牧民の間に精神的な連続性は認められないという見方には与さない。むしろ、たとえ系譜的にまた種族的に異なる前時代の遺蹟や遺物であろうとも、そこには彼ら共通の遊牧民の祖先の霊魂が宿る聖遺物と認識された上で、それら前代の遺物を自らの遺物を作成する上で積極的に利用し、自らの聖なる遺物としてさらに厚みを持たせるべく取り込まれていったと解釈すべきであると私は考えている。こうした副次的ではあるが、今後の岩絵資料を考える上で有意義な成果を出すことができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① Takashi OSAWA, The Political and cultural contacts between the Old Turkic Qaghanate and the Tang dynasty of China, Mongolica 21/48, pp.356-366, 2008（査読アリ）.
② Takashi OSAWA, Who was Apa Tarqan during the reign of the second Eastern Turkic Kaghanate in Mongolia? 『欧亜学刊』第六輯, 中華書局, pp.206-219, 2007（査読アリ）.
③ Takashi OSAWA, Buddhism Law and the cultural-political role among Old Turkic peoples in the early Medieval Mongolian SteppeChingiskhan I Sud'bi Narodov Evrazii II, Buryatskogo Gos. Universiteta, 2007,Ulan-Ude,Buriyat Republic, pp.83-96, 2007（査読アリ）.
④ Takashi OSAWA, Ongi site and inscription as the Historical Sources of the Ancient Turkish Qaghanate -Based on the International Joint Researches Bteween Mongol and Japan in 1997-, Uluslararasi Sürekli Altayistik Konferensi Bildirileri 22-27 Haziran 2003, 2007, Turk Dil Kurumu Yayinlari, Ankara, Turkiye, pp.323-338, 2007（査読アリ）。
⑤ 大澤　孝, 近年におけるビルゲ可汗遺跡の発掘調査と亀石･碑文の方位からみた対唐関係-トルコ・モンゴル合同調査隊による発掘調査簡介-『史朋』39（北海道大学文学部, 東洋史談話会）, pp.14-38, 2007（査読アリ）.
⑥ Takashi OSAWA, Aspects of the Old Turkic Social System Based on Fictious Kinship (The Analysis of the term <kut (slave)> in the Orkhon -Yenisei epitaphs), Kinship in the Altaic World, Proceedings of the 48th PIAC, (Eds.) Boikova, E. Rybakov, R. B., Wiesbaden, 2006, pp.219-230, 2006（査読アリ）.

〔学会発表〕（計６件）

① Takashi OSAWA, On a traditional reutilization of Old Turkic monuments and the cult-cultural background among Old Turkic peoples in the southern Siberian Steppe- Through the international joint Expeditions-, 第３回トルファン国際学術検討会及びユーラシア遊牧民の起源と移動に関する国際学術検討会, ２００８年１０月１９-２１日, 新疆吐魯番学術研究院, 中国.
② Takashi OSAWA, Buddhism law and cultural and political role of ancient Turkic nations in early Medieval in Mongolian Steppe, ブリヤート共和国ブリヤート国立大学他主催：第２回「チンギズ・カンとユーラシア諸民族の運命」に関する国際学術会議、２００７年１０月１１-１３日, ブリヤート国立大学、ウラン・ウデ, ブリヤート共和国, ロシア連邦.
③ Takashi OSAWA, The Old Turkic Sites and Inscriptions, エーゲ大学トルコ世界研究所主催、第１回国際ユーラシア考古学会議、2007 年５月２１-２４日,イズミル, チェシメホテル, トルコ共和国。
④ 大澤　孝, 「オルホン碑文における亀石・

碑文の向きと中国からの影響について」（英文)第９回国際モンゴル学者会議，モンゴル科学アカデミー，　モンゴル国立大学，２００６年８月８−１２日．ウランバートル，モンゴル国.

⑤ Takashi OSAWA, The sacred mountains and the relationship among the Old Turkic peoples, The 49th Meeting of the PIAC, July 30 - August 4, 2006, Institute of Turkoloji Studies, The Freiburg Universsity in Berlin, Germany.

⑥ Takashi OSAWA, 「古代テュルク諸族における聖山信仰について」(トルコ語) , The first International Turkish Culture Congress, 9-15 April, 2006, Izmir, Ege University, The Institute of the Turkish World Studies, Turkey.

６．研究組織

(1)研究代表者

大澤　孝（OSAWA TAKASHI）

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号：20263345

(2)研究分担者

該当無し

(3)連携研究者

該当無し